

競馬がますます
楽しくなる

続 ファンにやさしい

馬学講座

第52回

馬はどのくらい賢いのか、馬の知能について②

講師

楠瀬 良さん

公益社団法人
日本養馬協会の
常務理事



案内人：辻谷秋人
text by Akihito Tsujiya

簡単な計算ができる馬、
クレバー・ハンスの真相とは

馬の知能に関する話題になると、必ず登場する一頭の馬がいる。20世紀初頭のヨーロッパに一大センセーションを巻き起こしたこの馬は、クレバー・ハンス(賢いハンス)と呼ばれた。サラブレッドではなく、オルロフ・トロッターという繋駕歩用の品種である。

「ハンスは時計を読んだり、簡単な計算ができる」とされてきました。ハンスに問題を出すと、彼はその答えの数だけ前脚で床を叩くのですが、それがことごとく正解だったというのです」

楠瀬良さんによれば、ハンスの能力の真偽を検証するために心理学者や獣医師、サーカストレーナーなどからなる「ハンス委員会」まで作られたのだというが、その委員会の出した結論はシロ。「ハンスの能力にトリックの痕跡は認められない」というものだった。あらかじめ決まった正解が用意されていたり、ハンスの調教師が合図を出したりといったことは

なかったというのだ。

とはいえ、馬が足し算や引き算の計算をするというのは、にわかには信じられる話ではない。検証委員会の判定が出てからも、その秘密を探り続けた一人の心理学者が、ついにその謎を解くことになった。

「ハンスは計算をしていたわけではなく、周囲の人間、観客の反応を見ていたのです。ハンスにある問題を示すと、それを見ている観客は当然正解を知ることになります。ハンスが前脚で床を叩き始め、

その回数で正解に近づくたびに、観客の緊張は高まります。そして正解に達したとき『できた』と感じた観客の緊張が緩みます。その緊張の緩みからくる微細な表情の動きを見て、ハンスは床を叩くのをやめていたのでした」

観客にも正解を知らせないでいつもの解ける計算をさせたところ、止めどころがわからないハンスはいつまでも前脚で床を叩き続けたという。

馬が多くのことを学習すること、
競馬は成り立っている

言われてみればなあんだと思われる話かもしれないが、しかし観客の細かな動き、その場の空気を読むハンスの能力は、驚くべきものである。

そしてもうひとつ重要なのは、このハンスのパフォーマンスが、フォン・オステンという人間によって調教されたものだということだ。ハンスは、問題を解く手順(これは計算をしたり時計を読んだりとといった問題の種類によって異なる)や正解の手に入れ方、解答の仕方を学習

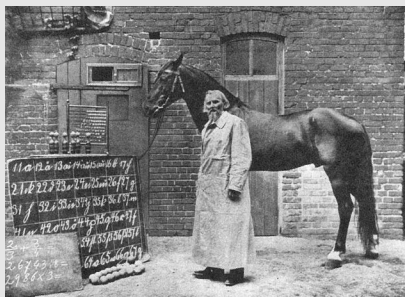
したので。

「馬は学習する動物です。そもそも競馬というものは、多くの学習要素で構成されています。背中の人に人乗せることに始まって、ゲートに入る、ゲートから出る、騎手の合図で走る、最後の直線ではスタートする……と、馬がいろいろなことを学習してくれるから成り立っているのです」

しかし、この馬の学習能力が、人間にとってもあまり都合のよくない方向に発揮されることがある、と楠瀬さんは言う。

「ゲートで立ち上がって騎手が落馬したら、競走除外になって走らずにすんだことを学習して、レースのたびにゲートで暴れる馬がいます。また、いわゆるズブい馬というのは、一所懸命に走らなくても困ることはない、一所懸命走らなくてもいいんだということに気づいた馬なんです」

嫌なこと、疲れることから解放されるという快感が記憶につながるのだが、次回は馬の記憶について、少し詳しく考えていくことにしよう。



世間を大いに賑わせたクレバー・ハンス。
当初は簡単な計算ができるとされた